

本通信は、一般財団法人地域活性化センターが主催する地方創生実践塾in海士町の運営グループと法政大学現代福祉学部保井ゼミナールの協働によって作成・発行されるニュースレターです。

海士町(あまちょう)の医療

海士町は島根県隠岐諸島の中の一つである中ノ島のことで、一島一町です。コンビニも、スーパーもない、信号機もたった一つというとても小さな島ですが、そこには昔からの地域住民の知恵と新たな移住者の視点が融合し、地方創生の分野で今とても注目されている島です。

さて、今回の海士町通信第三号では、海士町の「医療」を取り上げます。

新型コロナウイルスの感染拡大により、院内感染、医療崩壊などの言葉が飛び交い、医療体制に不安を感じている人たちが多くと考えられます。都市部では深刻な人手不足に悩まされています。そんな中、医療体制が不十分な離島ではどのような医療がなされているのか、海士町の医療に迫ります。

海士町には診療所が一つしかなく、常勤医師はたったの二人で、そのため、大きな病気が怪我をした場合は、本土の病院に行く必要があります。そんな海士町では「ないものはない」と割り切って、病気が介護が必要になっても自宅で過ごすケースが多く、在宅看取り率が全国でも高い傾向にあります。これは医療体制が充実している都市部にはない大きな特徴でもあります。では、島民は海士町の医療体制に対してどのような考えを持っているのだろうか。



海士町唯一の診療所「海士診療所」

濱中香理さん特別インタビュー第3弾 「島民一人一人に寄り添う」

Q1. 海士町は医療資源や人材が不足しているという現状があるかと思いますが、島の医療についてどうお考えですか？

A1. 島の医療は大変ですね。今、島に病院はないんですよ。診療所というのがありますが、大きな怪我や病気をした場合はフェリーやドクターヘリを使って本土の病院に行く必要がありますね。また、医師は二人しかなく、その二人が子供からお年寄りまでの全部を見なければなりません。でも、その二人の医師も高齢化してきており、一人の医師は今年定年なんですけど、町の方で、お願いをし、あと5年ほど続けてもらうことになっています。なので、その間に若い医師を見つけてこないとい島の医療は回らなかつたりする難しさがありますね。

Q2. 島の医療と都会の医療の違いは何ですか？

A2. 個人的に島の医療は、その病院の機能が都会とは違うかなと思っていて、都会の方は専門医、大きな病院の中にいろんな部署や科があって、そこで一部分だけを見ることになり、医師が入れ替わっても大丈夫だが、島の医師だったらその人の暮らしとかを見なきゃいけないといことがあるのでそこが難しさでもあり、面白さでもあると思います。

Q3. 現在、新型コロナウイルスが流行っていますが、もし島で感染者が出た場合はどのような対応をとりますか？

A3. もし島で感染者が出たときに、島の病院では対応できないということが一番痛いところですね。感染者が出た場合はフェリーかドクターヘリで本土まで運びますが、フェリーだと3時間かかってしまいます。先日、島根県漁業取締船「せいふう」という船による、感染者発生時の搬送訓練を菱浦港で行いました。この船だと本土まで1時間10分ほどで行けるということでしたが、この船は波に弱く、患者さんの様子を見ながら航行する必要があり、一度に運べるのが1・2人です。また、悪天候の場合はさらに対応が難しくなるので、今は感染しないよう、一人一人が意識して行動することが大切だと思います。



第1・2号に続き、今回も海士町人づくり特命担当課長の濱中さんにリモートでお話を伺いました。現在、島根県立隠岐島前高校魅力化プロジェクト及び地方創生戦略プロジェクトを担当されています。濱中さんの詳しいプロフィールは第1号をご覧くださいね。

診療所との思い出 沼田啓祐さんより (海士町出身 法政大学保井ゼミ卒業生)

海士診療所は島の唯一の医療機関で、僕も小さい時からお世話になった場所です。

医療の設備が充実しているわけではありませんが、診療所に行くたびに「どうした？」と声をかけてくれる人がいて自分の成長を見守ってくれていました。

また、島の人たちにとって診療所は医療機関としてだけでなく、憩いの場、診療所などの役割もなっていたのではと思っています。島だからこそ一人ひとりのニーズに合った形となっているのではないのでしょうか。

地域活性化センター 宮崎真菜さん

(令和2年地方創生実践塾in島根県海士町 企画担当)

今回の地方創生実践塾in島根県海士町の企画担当をされている宮崎真菜さんの自己紹介です。

静岡県牧之原市職員で2019年4月から地域活性化センターに出向中です。海士町の皆さんの温かさと前向きさにいつも刺激をもらっている公務員のひよこです。隠岐牛の美味しさが忘れられません。

本号担当学生による編集後記

今回話を伺って、海士町の医療には都市にはない島特有の魅力があることが分かりました。特に、「医者は病気という部分だけでなく、その人の暮らしや人生を見る」という言葉が印象的でした。診療所は一つしかなく、とても医療が充実しているとは言えないが、そこを補うほどの関係性が築かれており、私はそれを少し羨ましく感じました。

法政大学現代福祉学部

福祉コミュニティ学科 保井ゼミ2年 佐野健太



←今回の「地方創生実践塾in島根県海士町」の詳細や海士町通信のバックナンバーはこちらから